

Japanese Graded Readers

レベル別

日本語多読

ライブラリー

にほんご よむよむ文庫



レベル 4 vol.1 1

雪女

ゆき
おんな



原作＝小泉 八雲

簡約＝粟野 真紀子

挿絵＝久保 コレオ

監修＝NPO法人日本



にほんご よむよむ文庫 レベル 4

ゆき
雪

おんな
女

原作（げんさく）：小泉 八雲（こいずみ やくも）

簡約（かんやく）：栗野 真紀子（あわの まきこ）

挿絵（さしえ）：久保 コレオ（くほ これお）

監修（かんしゅう）：NPO法人日本語多読研究会（にほんご たどく けんきゅうかい）

<監修者紹介>

NPO法人 日本語多読研究会 (にほんご たどく けんきゅうかい)

当研究会は、学習者のための「読みもの」を作ることを目的に、日本語教師が集まって、2002年1月に発足しました。2006年9月にNPO法人になりました。「レベル別読みもの」を開発したり、それらを使った「多読」授業の実践・研究をしています。http://www.nihongo-yomu.jp

レベル別日本語多読ライブラリー (にほんご よむよむ文庫)

[レベル4] vol.1

雪女

2006年10月10日 初版 第1刷 発行

2008年 9月29日 初版 第2刷 発行

原作：小泉 八雲

簡訳：栗野 真紀子 (日本語多読研究会会員・日本語教師)

作画：久保 コレオ

監修：NPO法人 日本語多読研究会

ナレーション：篠原 明美／山中 いっとく

録音・編集：スタジオ グラッド

デザイン・DTP：有限会社トライアングル

発行人：天谷 修平

発行：株式会社アスク出版

〒162-8558 東京都新宿区下宮比町2-6

TEL.03-3267-6864 <http://www.ask-digital.co.jp>

印刷・製本：株式会社光邦

許可なしに転載・複製することを禁じます。

乱丁・落丁はお取り替えます。

©NPO法人 日本語多読研究会 2006

Printed in Japan ISBN978-4-87217-627-8

日本語を勉強しているみなさんへ

「にほんごよむよむ文庫」は、

日本語を勉強しているみなさんのための「読みもの」シリーズです。

楽しみながらたくさん読んでください。

やさしいものからたくさん読むと、知らないうちに漢字の読み方や言葉が身につきます。

読んだ話をCDでも聴いてみてください。読みながら聴いてもいいでしょう。

目からも耳からもどんどん日本語を吸収しましょう！

「にほんごよむよむ文庫」4つのルール

- 1 やさしいレベルから読む。
- 2 辞書を引かないで読む。
- 3 わからないところは飛ばして読む。
- 4 進まなくなったら、他の本を読む。

にほんご よむよむ文庫 レベル 4

ゆき
雪

おんな
女

原作（げんさく）：小泉 八雲（こいずみ やくも）

簡約（かんやく）：栗野 真紀子（あわの まきこ）

挿絵（さしえ）：久保 コレオ（くぼ これお）

監修（かんしゅう）：NPO法人日本語多読研究会（にほんご たどく けんきゅうかい）

ある村に、茂作と巳之吉という二人の男がいた。

二人は山で木を切って、それを売って生活していた。茂作は六十歳で、一人暮らしをしていた。巳之吉は十八歳で、母と二人で暮らしていた。



毎日、巳之吉と茂作は一緒に山へ出かけた。

村から山まで行く途中に、大きな川があった。そこには渡し守がいる。渡し守は、舟に人に乗せて川の向こう側へ運ぶ。

二人は毎日、川まで来ると、渡し守に舟で川の向こう側へ運んでもらった。山から帰るときは、また、渡し守に舟で川のこちら側まで運んでもらうのだった。

ある冬の寒い日のことである。

この日も、茂作と巳之吉は、朝から山へ行つて木を切った。暗くなつたので、二人は仕事をやめ、帰ることにした。この日は、いつもよりずっと寒かった。

「今日は寒いなあ。きつと雪が降るよ。」

巳之吉さん

茂作が暗い空を見ながら言った。

「本当に寒いですねえ。雪が降ります」

ねえ。早く帰りましょう」

と、巳之吉が答えた。



二人は急いで歩き始めた。しばらく歩くと、空から白いものがちらちらと降ってきた。やはり雪が降ってきたのだ。雪はどんどん激しくなった。あつという間に地面が雪で白くなった。二人とも、心の中で同じことを思っていた。

—— 今晚は大雪になりそうだ。ああ、寒い。早く舟に乗りたい。そして、家に帰りたい ——

二人は黙って歩いた。川に着く前に、もう辺りは一面雪で真つ白になっていた。遠くの山も木もみんな真つ白だ。

やっと川に着いた。渡し守がいつも客を待っている小屋も真つ白だった。

「あつ！ 舟がない」

二人は小屋の戸を開けた。しかし、その小屋に渡し守はいなかった。渡し守は、雪がたくさん降ってきたので、仕事をやめて帰ってしまったのだらう。



「困ったなあ」

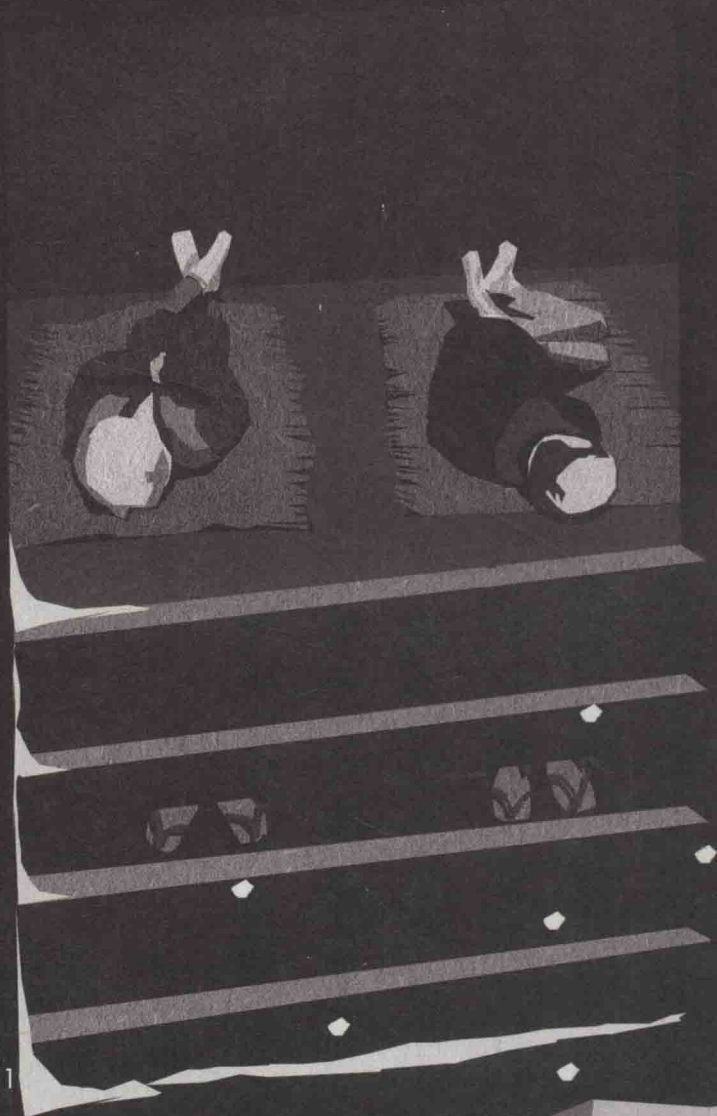
「これでは家に帰れないなあ」

雪はますます激しく降ってくる。二人はとても困って、しばらく川をじっと見ていた。

「雪はこんなに降っているし、寒いし……。仕方がない。明日までこの小屋で待とう」

二人は小屋に入った。小屋はとても小さくて、戸が一つあるだけで、窓もなかった。二人は何もすることがないので、その小屋で横になって休んだ。

茂作はすぐに眠ってしまった。しかし、巳之吉はなかなか眠れなかった。長い間、風の音や雪の降る音を聞いていた。大きな音だった。空と山が怒っているような恐ろしい音だった。川の水もゴーゴーとすごい音で流れていた。小屋は風でガタガタ揺れていた。空気がだんだん冷たくなっていく。巳之吉は寒いし、怖いし、なかなか眠れなかった。しかし、疲れていたもので、しばらくすると眠ってしまった。



どのくらい時間じかんが経たつたのだろうか。

—— 冷つめたい！ ——

巳み之の吉きちは目めを覚さました。顔かおが冷つめたい。まるで顔かおに雪ゆきが降ふってきたようだ。目めを開あけると、小屋こやの戸とが開あいていた。風かぜで雪ゆきがどンドン小屋こやの中なかに吹き込こんでいた。小屋こやの中なかは雪ゆきでほんやり明あかるかつた。

—— あれ、どうして、戸とが開あいているんだらう。
風かぜで開あいてしまったのだろうか。おや？ だれか
いるようだ ——

巳み之の吉きちは、横よこになつたまま思おもつた。

—— 確たしかにだれかいるぞ ——



白い着物を着た人が、隣で寝ている茂作の上に
乗っていた。

—— だれだろう！ 茂作さんに何をしている

んだろう ——

よく見ると、その人は黒く長い髪をしていた。

—— 女だ。女に違いな。でも、女がこんな

ところで何をしているんだろう ——

巳之吉は起きようとしたが、体が動かなかった。

女は、茂作の顔にゆっくりと自分の顔を近づけて

いった。そして、茂作の顔に息をフーッと吹きか

けた。その息は白い雲のようだった。女の口から

細く出てきた白い雲は、茂作の顔にかかり、それ

からキラキラ光って空に上っていった。



